雪乃古道

亨

別記

和書門 類
二二八四七 號
一〇二 函
一二 架
四 冊

内閣文庫
和書 類
二二八四七 號
四 冊
一七七 函
一九 架

内閣文庫
番號 和 22847
冊數 4 (2)
函號 177 1076

当流ある改巻第二

さきつ比のとしあらたまりて寛政と改元ありて江戸の
御所にも御慶事さしつまり伸しくぬるけしきそれ
世中はにぎやかなるけしきことおぼへてあひやる
あるさきのとしよりおもこそより焼亡の事ありて
町よりも流行なりし、常色也月のなかに一夜焼
たちまちにうちはらきのこるふなりぬるなとききて
今は花も盛りと咲そむるひとへにゆうしかくはるが
なれはちりしいありさまるをなふこともひなく
それかへさするやうにあはれもせんかたなきさきにし
けり

日本政府図書
内閣文庫図書
六六〇六番
明治十四年購求

おもきゝつまさとけえつるあらしにちる桜
さひもさうし花のたくひあるめへみや以ての年も
かゝれてははあられなと人のいふをきゝもいとらし
浅黄をまふの梅とあふみな次ましして桃の
花なとといふひもうけすたまへくとさとりとをう
花のなりましうえなりて一枚のくきなる井もみる
ことかりんやいとふふをあてへもりよりさ[illegible]
のみまても咲さにせぬ桃のむかちもまて
此や春はまうらん
なゝ山といふところにも多ふ金勝寺の山かけ
当代とさころ語りてこゆるにある数のうきん

小鶯のなきされそ
当流さまてとるしぬらくひさいしたまゝ
あくにくろ緑なくらん
昔よりの古墳の漆の沖まて網まつるらんとて登
かけるを人々きせ川いとのなれそあやしれ高
なきそかしこより町はのさになりまゝとしたし
とあくらとそなるかは丸う白うてさめらもとのあとく
うろこもなくえうくへらくとしてかくくそけは尾
をとけてそて一さのまこ一さうにふるれみ当代うて
まそて尻ときまこみあめてつるのうとみこちくみて
たて七寸まこし九寸何さとい出てて六寸まこひとき

一あまさとれきゝ濃き色うす墨乃色ふてたてき
まとふりんみあまきれ色墨也又同し色ふてまそ九き
横田き尾もまさ同しうすゝみ乃色してうすちいそつき
たる墨乃ことく也なすゝれ河や河りたるなきさにまそ
一さらあまりよこ三寸えくり也ひ色あまいうす墨乃
色すてはあなそくのことく以をいうし松前よきり
まはたりく出くるうをみて人もらひをなす
かんれうさあと以つれこをなまし
あるき人の以つれ

一体白色ニシテ肉カタキヿ鮫ノコトシ尾ヲ合セテ縦二尺横一尺
二寸五分口ノ廣タテ一寸ヨコ一寸五分目色ツ子ノ魚ノ如シタテ
七分ヨコ九分目傍ノ喉タテ一寸ノ
ヨコ六分喉傍ヒレ淡黒タテ二寸
五分ヨコ二寸左右ノ鰭淡黒
色タテ九寸ヨコ四寸尾淡黒色
連滴ノ文アリ腹下嗜ノ如キ
モノアリ鮫ノ皮ニコトナラズ
ヨコ三分タテ一尺寸
右ハクジラ尺ニテ量レリ

柿本の社に酒のむとて人々遊ひけるに小梅君清恵

神祇の心をよめる

かける香に匂ふ香も梅のえにあさからぬ君
乃きもまつらん

ち川乃ちんく色も志らんむかしより世々に
たゝしくていろこそかはらく

明らかなる心をよする神のまにまに九重
おかりましけん

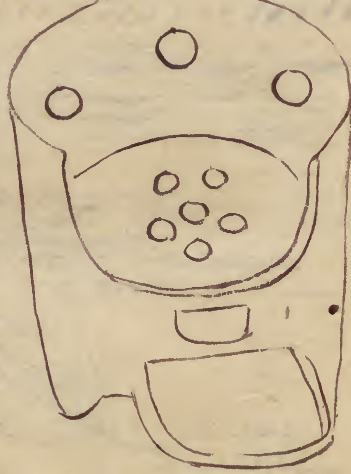
乃とかなる日一家侍にまいりてゆふへまてありく
城さ坂のなかえよりこれを城の院のならもおもけ
ておはしましけるに浪たちし山乃見る色ある家居並清

なを本船さかりくれともとのあひかたけれとも引く
人なくいかなることかさ見かけさるかしきたてる山を
かまりは海つらそとく明て浦ほれむら里もまく
さくらもとに高嶋奥ありてくるきとくうきくあり
しらくはつかるまてなきあのくかりぬ

海ちかき
松乃えこし
かすむ日と
ゆふへとの〻声
里乃と絶ゆる

十六日朝のとうに晴てあさうけさなと江戸より旅立
京にかくらん流を書そこはこもりかりなし
いつさしにあまつそくとふきひきていまとえかね
契をきこえてゆうてうちかしく矢橋のうきり
をもむく城より行あまりて漆ようすなれハ
ふ橋人馬をとひなとききひくらうかくて紀中を
舟川、下町なとといふをこえて縄手にある東ちはい
きをひくの高根かん色ちに流きて高白うるあこと
たゆまんなといふハ此をうけてかたきつなといふ山
ちうくみ山うちえきたるところかゝりてめつらしう
みんとすなりてに東照宮北とてしろあり別当を安置

院といふ東えんの山より傳路す かくに日吉の三四迄
もいりうりくいるしう法なきも多里門おの家
居ゐるものなどかまくゝ寺絶法事かた茶屋町と
て法称よあまふ人まゝぬところなりとゝとみな造る
家ありさうくの掛法かり以て家をれなしく
まへ川松前よりさて湊帆まてかいとしゐるそあ
みるにうく出くれんをもてと何てむる風呂とけるは
て法かり以てすあさひの覚し掛かり、とをより
あるかたけきしえ
此ふくも家にとりてそくとく
さるところなし



石

村乃すゑに川あり草生津といふ橋のもとよりこれを
ゆく濃き海乃山をうりまちまちちう乃さうひまて法称
ま見なれし山ゐはかくりうるよいなし橋をゑれは
松のなかと木ありて宝塔寺といふ門前なりみきりに
めくりて見ゆえ行かうもいれはさうひいそなさにゆく
もてみつくれさうのきし村もまうりてかこやのなれ
かうにへうりて出く

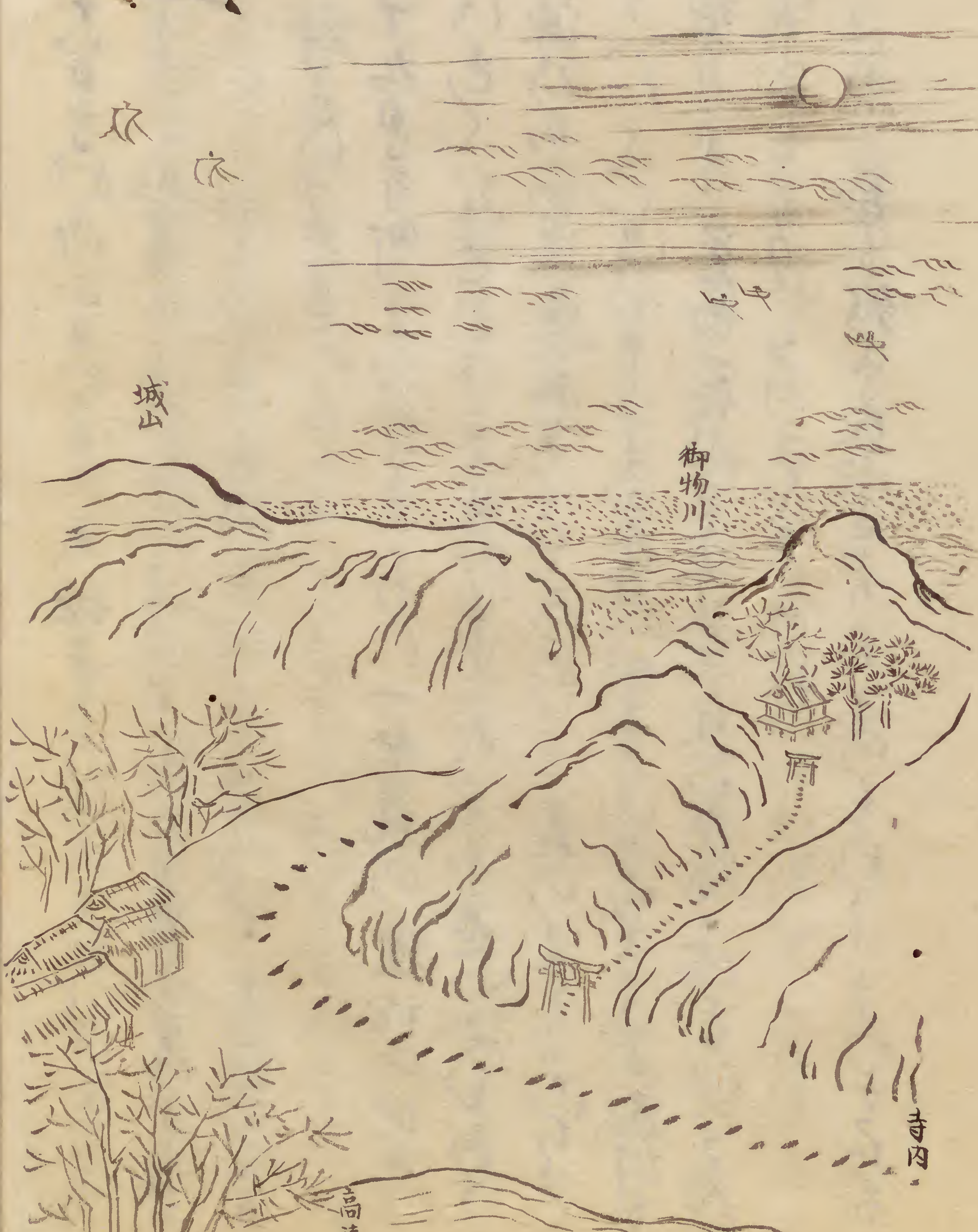
寺内
鳥海山
御物川
全良寺
宝塔寺
矢橋
草生津川

きりとぢしなれは日うけうとくてたびのぬるをかは
りぬそこなる道をたどりゆくほどもなき心地して
寺内といふ村にいたる古四王権現とてまうでぬ
これもをはりあしくこゝにさりしかは人々まうでて
そなたりて姥石の坂をうちすきみゆる山のいで見
に高居ありてまへよりのぞめはむかひにあたる山
尾をとゑつゝ海つらを伝ひて高岡本ののちも見え
そびゆるおとみれは本院さかたなるに高岡大銅の
年ふりきこえしめしといふ田村よりし記と此寄附きて
後も読もあれど今は何ぞこなるかはつくりけれと
とふゆあつきことのてこりしひ偽ゆありて高居

のりゐなる前よりてゑれかゝひくふくて高清水とん
とて海辺の岡より山の麓にかゝる秋田城介とのゝ
家司ありてつまへくる所とて古きいしすゑも残る
山のはそのかたも残りてさらふ所ありてあり此清水を
そのかみ城内にありけるをいふとていまもしるき
水まていさゝかよしまあらひ清ひあくる清井でふ
清くてこに流るゝもたえる高清水なかれての
世にのこるとしも又梅やしきといふ所と聞く
むかし城介實季朝臣すみ給ひし時梅をめでて
多くうゑし所とて今も名にいひ伝ふるになんときゝ
見れかくしにのぞみてけふは黒とうし給ふにかゝつて

菅原の家まうてにおくまりたる所なり
ゆかし梅はいつへん畑に侍男の見とこまぬさて近年
までは花のありしも家居して侍りしとそよろへ
ぬる後はたちへまかりつとも侍るかと枯るる梅
もかきえうりは侍りしとそ今も久しう此ぬ色こ
今はその根さへおし次その後はそもしうまこうに侍
とをしぬくはとうひなき心地して此るあひ
てまうそぬもろこの葉田にかへりぬるさあれ
さうとおちまそてところもかし次なしう記なき事を
今更よくうなくそれなくもふめり
くらき舞る昔をとて梅の枝のありし家の

はるかにも船さ出るの浮よにあ浦八まんの宮とてあり
見るもしよきところ侍りとそ又かしこにとこつ木
の根ふとよちて三面しろのうろめる山よりの行て
三色六まうとに出しよりは見えまさりしてくされくる打
むかふ山のあなたをめぐりて御物川といふなる河の
海へとはしりひるもうたちける所をも常をうつきてる
こくおとふさふへき末にもせらる色は北の海えかくこゑ
帰さる船もくとられく夕日浪よううつろひて白う見ゆ
らる色多るおとの気色も以そんうくなし浜のころ
さりりわするれとひ欲しともあるへ心ちして又
しくうなうめ居てり



霧まかりて波しけく細日もさしけり山の
くひよりそこらさとゝいとおかし日ハまさるゝか見えし
かし矢橋のなかくて咲きひらくにきこえてなりぬ
なのそよなかふにあらせてくさまふかよありしうへさ
おありん人てりふのあそひをこすもて花さうにもされ
ありひこあつと路をよそく

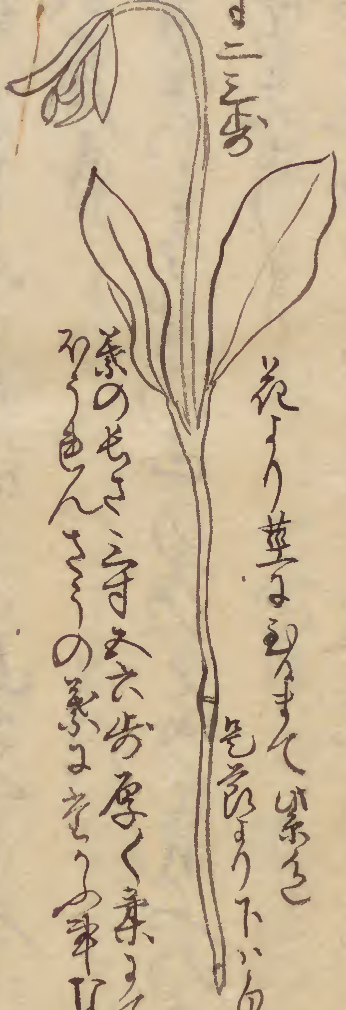
あきぬ

十八日は御正日なれハ天徳寺といふ寺に詣りける所
まうでぬ昔をしのびつゝ次よりの院家に覚えしかハ
此しくの春の昔ならぬをうつゝ本堂の前に
神なひのさき
十九日寺町といふ所に一家院の遊行の地あり
清らくなるゆへかしこにゆきてあそぶ庭ことにきよら
池の汀にも所々ありて左右にし花の木ともたちて
うへたるが清らかさ花は紅くふくらみ如何も
桂かしらう覚ゆ花の色さかりすはかなしつ次とひこん
なれとてもとりこちらく[illegible]め哉
あすも新に花のさかり色香のこゝろもまうでちらぬ

ら次庭は木のとふて
本百一家院まて高野大師の御影供とこなふ所
まうでしふくて御花佛前に進懐とふてる人を讃
つかなきハまつりかゝる山さくらに清くさて
花ハ見へ新ぞ[illegible]
釈日まつ高野の山の御とあて此ゝのりハ
世くりきこえをし
穀雨は花のいろる白かうたる花とてあるしの
人を見る菜は薄くひかり似て花に似けう花はくきも
おかし多けりもとへのむすて卵むのうちし長さ
一寸にあまり花ひらハ六ひら花の色んでもむらさきにて

ふくるゝ葉をそへてさいつり家にうへさすせうら
うなる事もなくてそれのと花の二葉にてあひ
むらりはくふへてうつくしあら物すやいとおかしくまて
くりりしそ

花のなかさ一寸二三分



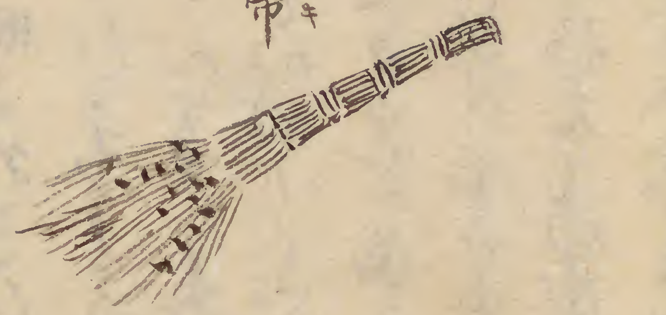
花より茎にまて紫色
気部より下は白し

葉のなかさ二寸又六分厚く柔にて
わらかんきの葉にそうふ事なし

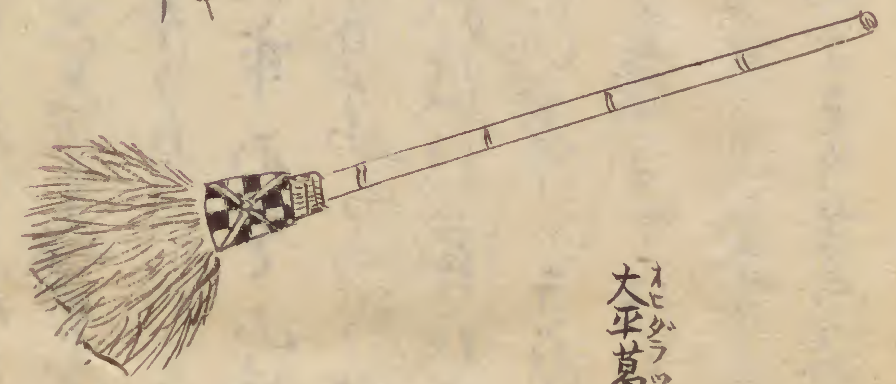
灰ゝに見なれしをあらく花のかくれるはめつらしくとえき
ころをかましるをは口わなるあしなあをはくあつりうさこれ
ありとふはそのうへはくすといひくろうるみそ

ゆうまにいつるよなんところてんは多くなとりしは松前の
まいとはちらんちよちうとはさきらうひの粉をは
松前れ称あわり
大町に船とに市ありて山緒田舎ちうり此人なりと称く
こひ来くらりふくさく浩物はとりきひはきそ
うらん笊事末北彼浩花おわけなしめなものあさくひ
いとおかしきらひ笊にきらひのかすてはくりなるはゝき
そうさんは海の藻まてはくをもなるはゝき也はらはおな
松ひくまりもてくいふやしいふ木をとりてあつをおな
けかかえて乃樹をとりてくるみ也るかるそなりさそと
は人文を炭なしみるのとこし

黍帚(きびはうき)

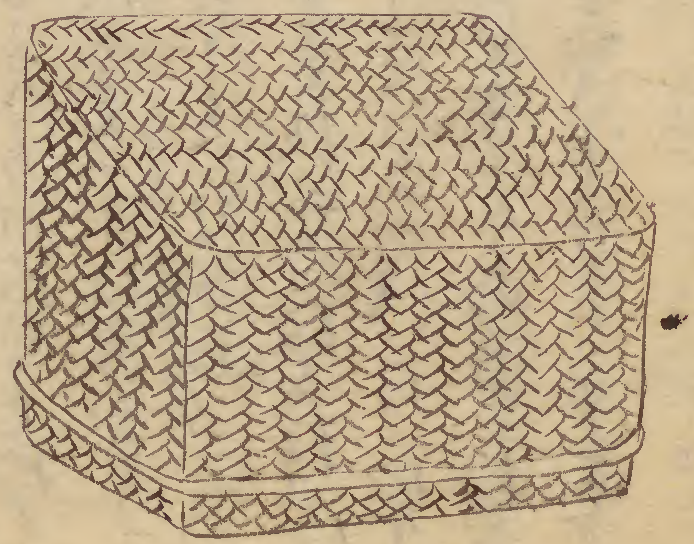


馬藺帚(ばりんはうき)



大平葛籠(おほひらつゞら)

たぼけ



行き人の持たるふうち紙袋たはこ入もむかしは紙をもて
紙乃かつはに造る様なりけるよ此頃の持といふはく
をひらくとてくゝせなるあてとて板をとりみさ孫
て紐つけたるをふるのありしかひの革をとりのさ〳〵
に似たる山繭の腰に佩る火打ふくろありたるを
なとをもたくはへしさとはそろらんとていへる皮の
皮みな檜乃皮をとりてあるへき持なり山刀ぬきて
はきそてうちをえきて濡もなくてはくもはやもこれ
なく桜乃皮をもて造る桧の皮笠といふをとうへる
檜の皮にて二尺はかり此布様をうにあきてうし
所によろはとしろしとぬひく〳〵のへるなりも毛をひ

といふものをはく熊の皮なけある様をもとてはく
また案内をはくもそあるも也といふ

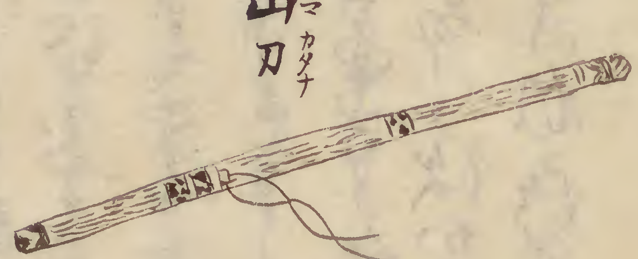
背中當（セナカアテ）

荷俵（ニタハラ）

市までもとめしとて梅の花を人の贈りし袖こと
はわえのちはあきとりふいの野の薄非へ来て書ける
ましいたもの折しなりといふいはと何まりる枚原
つくなりけり花売人をおもひやりけりとも

檜皮笠（ヒノカハカサ）

山刀（ヤマカタナ）



毛足袋（ケタビ）

胴乱（ドウラン）

待えしもうらめしくて

　山里の雪まにさくは墨か花なるらんかし

仏性すゝむる梅かえ

うえ姫を於もひといへる法師ありけれもきこし

くもはなひしうへ此的と梅よりわすむときゝて

わらちかしこにゆるひをおちすかれい陣中のあき

人なりしうへや世をとうしてかしおもひて

てことり井さもしあるふかなきたれさもけきをいと

ひて雪のきゆるすてをもいつも人の國よありて

春乃来るはかおもし次かゝ不乗る事とすいゆるし

信房もかくてれはゆくへのぬみそれ来立しよし

ありてむ家よいひたるさぬ心をきなりけりおもひなきる

　日ころしかきりひを出ひはわもをるを

世をなきしくの人のこゝ帰てをのつからちりなまし

みもの苦かきそしけ

三月ゑの日世あらくもあこれ乃

　花をさまふまさき待あへてをのふとそてもとむれかな

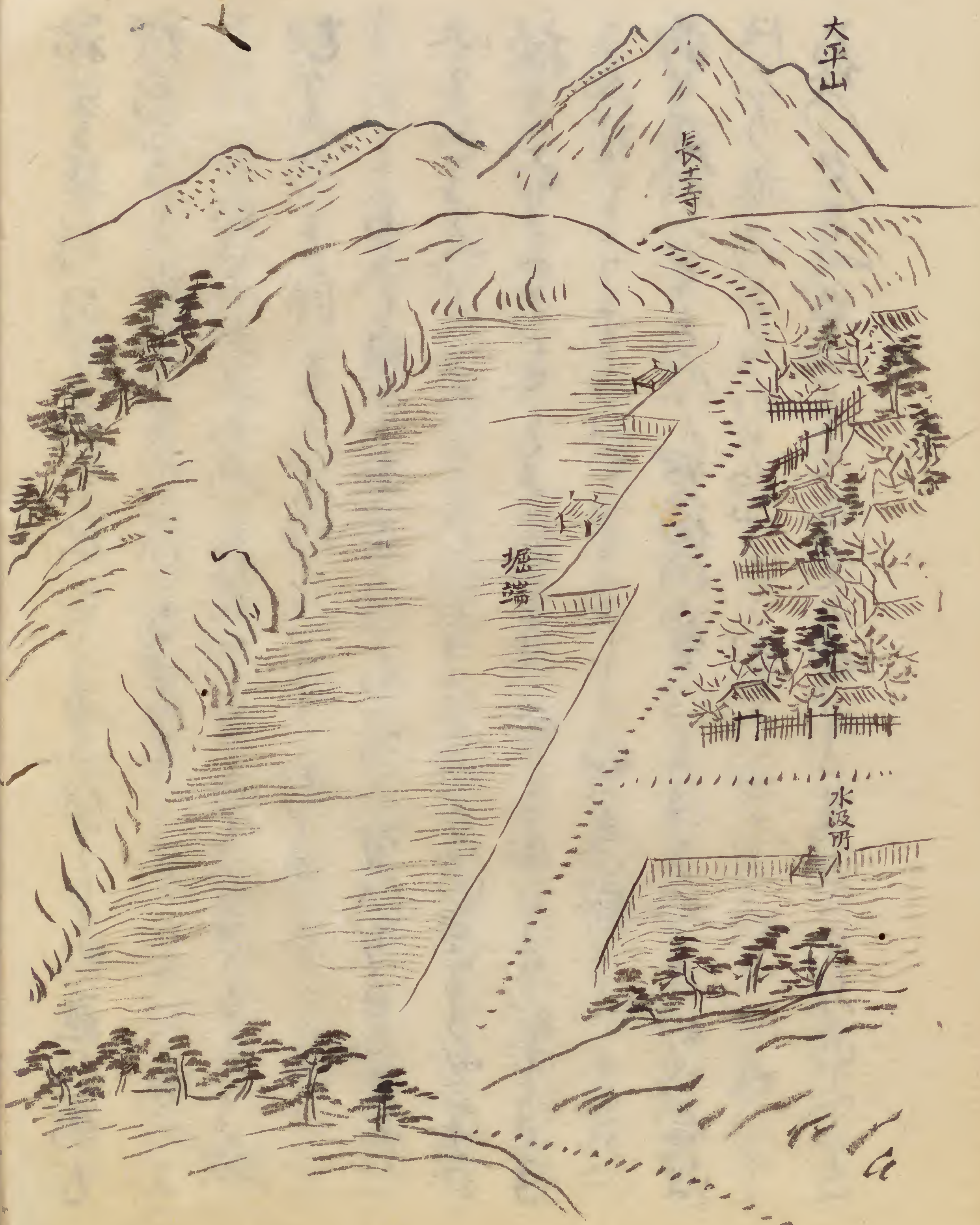
はなれ衣乃くまあ也を

卯月はゆてちか前

　ぬよのうる裏乃衣ふ花のまて乃ふより後や

立ちなりさまし

なり山へ行さるふ堺の南ふ行くるところなれい



りうけもよそに見へ行つゝふて堤をゆくめと
ふるさと北雲院水ようりてことりよ清きなかさ
に行りて松かさひしのふ山きたうそひえきえ
のこりなる宮のいろをもとう行う清しかく
てきし海きよく君ちそひ鳥る高くひえて
しん波ニ南亀ハ常ともりひつゝりぬ
清こ切あみとりなる雲院ヵ
宮をえいきる松くの山のえ

祐宣法師のうりかき梅てよみひしに庭乃桜も
散行ことなる夏をひろまして
　かくりあふんの花をとくふて春も志ら波
むかしのとけさとこひしかりあらし
　以てられても春の本像の匂ひをきんの花ハ
以てられん花さらハかけし波とひきさませ薬の
桜も志るまてそと此国月影女如せんかとさま
こんなとうつひろうしてかかりぬ
あまへ乃もとに紅梅の盛にまふりれくかろおほと
作りて何とひも心ゆくまと百志あやうに咲いて
花乃名くへもゆとくもて千鳥しておくれハ

　春夜乃あさいてくるしる花乃ことも中ふ連
ふうき梅乃くもなる
五日城の八まんゐう常陸より上りまゐらしけ五日
とて出かしきに神事あまり神楽城より矢橋の
いかりくまをいふところまて出させのふて御乃祭
見さ侍らもかをめし　みこ路馬よすて供奉したて
まいるまるの家国ねうしらかなる人々とりきよまいり
ておゐしくしらふまう報さうし人の侍什とそろくさう
え紀派のいりやよりも弓矢まる統のきそくひ教
かくしきそてけ以あいありさとしかき弦齋子と
此国ここ連ハ神楽かたりいくとのふ中まて内陣より出す

はるかにうつるかゞみし馬とあるは神影をねまいり
つたへてえんにさしそへたてまつる神輿をその
ありさまをうつしてかきとめて何。そも此神影は尊くしく
相州露の邑乃御正體をうつしをのかとそあつまる
これつたへとや義人ぞ足ともいひし君ゞ鎌倉にもひ
ある時かしこのこゝはる子といへるにかよひて詣
ちにをそ御て以つきあるあゆみしよりはる子もぬさ
ちふくそりて八はんぐうにつかふまつりぬうれしす忍
きゝあへて女子のうち出たる事にて今御代露の夜
ゆめ祭つゝ世に一乃ことにて法ふまつきりをの胃に
いつとせ清嗣日此子らものすゝむにあづけまつるもの

とさつあら給ひなりおのこのちもすゝめ給ふ朝臣此秋田に國
うつりあまし時はる子も文をつとつゝあつさりて今に
かく待るなりといふ。いや鎌倉にあるの神影を
義人ぞ足乃筆にて正本乃八まんぐうを法さしく
もとの法つりにさうろをかねて足も、とらしこし
義人の君啓書記の弟子鳥けん谷宗之といふ志を
すゝひてよりて此道によくのひしうつかくいそうり
のひつといふ竹堂の門かうとそ世にいひ傳ふも
此君乃事なりき通ハかく書ぬれきてさもの子ハ書
事まうて國中とりていうしき祭りさしきゝ中々も
たゞうり小ふんけんゆへもろもなりうる次いづう

あるよれうかみさひこあ給へる事なりそれは宗祇
寺町の一条院乃花光ゆくうあかりひのまへの玉ある
多くもなとりもゐてさるこゑもさるく門さしへより
花のさくらくゆりかく留めてにおひゆるもんと紀めき
をしまて以そ花院とこの玉もよふひ以て花ある
うき程たゞし一声あけませて枝ふより居つゝ玉る
梅乃木のかきりへさる庭ありも雪林ふ
さいをも志乃ることを自もてゝろをくいくこともとも
おくく咲つゝきありけくあへは花と云なる梅ハまれまそ
いはにも八重乃こ何まさおもて彼も花さく事
のとそきをとりあへ雪れ消つまてあるこのに

めぬるまでとまやに招つけるさゝけるゆへまやされ
みしをおほさくら他つけふは桜もこまかなる
になんはなれてみる程にきるに庭まして池のほとも
はるかにみえるさ漢法師は人のんの海色なるまま里
濃きともうらひより植乃くつもなきとりとあ金く
んゆく招ひところ寺うけひある法師なる十
あまりみそりを云ひあまさ何まさひまさそてしる
きうりよりひかくしきちもしつまたひさかし
あるい山まふかりてうし桜さるふ侍ろひおち文
まて未るは乃月も枝をゆかさく花をちらしそ
てはてい何さらはくもれひまさ昔のことり

かきりし里に夜ふかきて池にむかへ月ちりつもりくまき
かたき人あるはうらひおくるに浪をそて又は中將
まなうきよりてまちかはりなとあそひくさ
ともきをひよりく花の紐ともえし多るあかね
んなしとうきてとをさなきんゆりにこきてとうな
きをみしさしと思ひ志あたるもまさ衣なれ
り中にも十四五そうりのつしえかくり里うなしに
そうちらうけ侍りやきせる衣をおつきしころかひ
なくかくさけなるちゝめより出雨笛と上紙
ちるちそこちつくきくきゝる衣らくしも
一つ志ふさく急咲なしきし夕くそく花の中に有

うつくまりてとえらり咲いつなふ乃声へといふ梅を
んとあそひふきりてゆくかとやうくしへそのひ
てんすむ計少なる夕風乃とりにすきて末葉を
ささるかにて此梅の花ともそこえうてなくちりも
へとれとし　源し

里乃子かゝ吹よる笛にちる花も思へ乃とけ
き梅乃あさこの緒咲とりまて見覚さりしに
花ちりともいつるふることも侍らふ興ありて思ひ
咲はは此ふえなうましくいろ／＼てしたなる
花のうけなうましゆき出つるそ
はしめて桜乃咲きるをみてすかん傍

菅家もときそめてさくら花さきおりさし
たるをもめてられしは小松殿なる梅にまちちらぬはなけ
あし花乃にほひそめしにいまそめいゝん
七日鳥羽野にゆきて五明といへる所の花の梅ある
ときゝて人とさひよる雜乃紅梅盛りなりけ
て鶯清来なきて思ひもよらす口すさみあひぬ
せんなかもしろさひまかんとするやとりなり
乃るも鶯も人々といふ夕を通りありけれ
梅乃木のなと云ひ清けられ尾上と遊ひ
かまへさらぬをことをやき田ゞ矢橋乃さとに
清めてあせりん人もかさねつゝ西寺町のさか

と遊ひて城下は家居来ぬるにたつき城乃まへ
橋乃辺くすまひもけちゝゝむかしもむらわさぬるし
の景かみはいつゝてさうえハいつゝ山椿の樹と
かきり南に仙洞乃山と海乃嶽まてはるかにゐる
きさふるこふむかしつれゆかしてあかぬさらつれと
里乃くれにかなるきれぬるにきてさへゑるひと
よなひよあひく山の櫻を帯ぬとけりてかくる
たるいつる乳し小田乃蛙そここちわりて
垣かの辺をもり人々ともゝてうるひつゝもる
思んけるめくるもの乃るひ也

大平山
八幡
寺町
寺
茶屋
鳥羽野

藤倉
天徳寺
泉村
山崎
苗代
矢橋道

若かるときゝつむかしありき　この山のとめ侍
おひつゝ後入る月は出ぬまてと松わか袖のきえぬくし
結ふ花をとゝめつかへるも心と奥ありて
なる人くさくさ行かひをきつ縁くは寺町志宗
此の花えんとおもはしうつまいの記しも此の里
あなたはをもし小法のひの男か下りくはふせん行かよの
花りんなをとらしてはさよりふさうきてあまれ記ん
なきよし紙うきひ侍ると云さしは心法にかはよは年
喜藏院の梅こそ花の樹もあまさ行かときく
行きし此大とこは此かと田舎へゆきてあまさはうち
とけあるうたにいかれもたにとしてそかしこにしおもむく

下種法師記とも細ゝる男一人のこゝにあ移ゆかり
なくなく花乃本にましゐし侍えとりわし
くらやのかさより置なとあはてくちみうちさる
もなきかりありし院はむかしより二十石をよせられての
まれきにそのまゝ寺付られ檀越もなきさり
つけく墓もなしと云ところも見てさとくれ
かくはとひよおもかへりては中ときよりなる心地
すとくとまうこふ此さ殊あはれし大とこ寺領乃
まうぬ事ともえうりてかく梅乃樹とあまき年
入交ふになるもあるは賣をとりて市小ひき紀
貴子法師なとうしろうこすこときそうよとせし

此ごろは梅の林をなして花の比もさかりなるべき所
とはなれるとぞ方丈の池と庭もせまけれ
ますておりまへてそれをとめて咲流きたる池の
邪ともかはらかりたるいとおもしろく前栽まで
芍薬のきそひあふさまへなる所もあれども
ともん出てるさまかしこにある丸の大とことなんある
て草木れんどもえてよくおもしろきあるべし
けりはさへたる人なりといふ垣根をかこひて麦
たちまたるとあとをたえたるに菜の花乃日なりしに咲
流れたることをさへぞうんやうにさかりなるも所々
うちあひて松の中なる江乃柳流るゝ所の西邪のと

あかしぬるもけふのしきん紙をすゝ酒のみて子らなむ
絶てゑむめすあそぶ夕の空乃ところに晴て明しに姫娘
入日本好むにしらもろひたる紅梅の白ふて紅ふひて
いとしきここちにおかしかりける

入日さ沈まもろ一むら良く見井ふたち枝乃
梅のまかふ夕かな

十一日はふ関信寺の花のもとにて詩歌の会あるべき
よしありしかば終て紫をさそひまいりよるも多縁以て
いふとおもひあはせしかりきも松くも見てうちそそけ
むらいとふ詠れたるもあらず花さんためかはかりは
見よとそなかく集もなかへきまさるべくもおもて

かしこにましし城より少し西にあたりて赤沼といふ所
まちあれそこの松やれにくりこりきてやうやく法師あまた
侍りしところは尊なきは此寺にはたいとにかしこき精舎
なり今日はそれ隠居の西行軒とはいへるみそにふり
たる桜あまたありてさやさんとてかしこにて
車にのりたるときく城のくるまをとめさせて六角町
といふ所へ到り給ふにすむ林の丘にいたりし乃家花こそし
まいらんとて道もかりわかれはなんとよりてこゝあまし
も家よりはるかなるとてそりゆくへさまさきなうて
くらふ庭はくるしき堤のへきてみしかりて二十
間ありあるに池をとりもちほとりみの水をひきて本立

すしかうちくらへ行もとり境乃むかひなる所にはいさ
おりきさけれは桜のさとへゆけるいろやき花なりと
見れは雲林の本れまふ桜たしかうしてさけることあれ
もまきつく池よりうつりさら影にうちむかへるさまこへ
かくれそうしもてしまされはこそあやふぬまひはうり
ふるとしもなきらの音かひらくゆりこそみまみすも
中に花の色をとうてなしひとつ庭なりてくえあて
かしつなきとうちある人と我かはいそとなへれかきられ

西風とりまちある門もたし宗其のむかひ
あれなれ乃下かけ
花はまたふ者乃本性も世乃かにすむこゝち

こゝろみる池あり　やかてとう済しまたけちとむかく
赤坂のうしろにいかく高ハ世こぬまたと霞こめてふかき
ところ丹見て坂は小田乃中にたゞよふりくれとも
なくて樹ある家ゞにうつろふか笠かしらと
ふくもかくたくひをなしへまつくあさかほにこゝ
松原をひしふこのまふ陀なれとかしこより城下へ
中さかよふさきよりに山懐にかなし坂をぬけのぼく
行所なれハかくてハある事として墨客さゝかへひむきや
ち乃松林ようよひていとおかしさて坂とのほり
くくりたふおまそかの寺はいかなる山をかまへて
みなかみふむかふる所なれハおとうこよりハあまつかさく

あの陀原もめやをたらんと云ふなき陀くて行
とりて新ちらき花本ふ済とふいとし本ちふ桜
の年へてうる本陀河まさ今うくと堅と咲つき
色るふめへりしうめとするりうけせられきまにて
本のさくとゆるゝるに花のさくも一入とこてん中る
心地を霞むなさひえまそりこれん十町あまり
古ちさてひくき山つゝなりめくりて樵よ架
ちまうふ松からな田つゝきてあれは此山のふもとに
まつそみえに坂山をとうしろにて松杉の梢高く
陀うき咲まうしろよる花もとさぬのとりかも
にそてりあるて本念寺といふ僧房ちかく

国立公文書館
National Archives of Japan

寺さる時は鐘楼なけれどもよしありて尾上
の松乃本末をかへして春ぬふれあらぬ一むら
をもしろきけしきあるに侍りてにとらしいかし猶求
にけるまて松陰なとかいかる村里をへて松かた
ひしにけりといふまゝにむかふさに南まで
田面よりおもしろまりて河を出つる村と野崎と
いふ本を往居かとゆかし給ふのさるかたより東
の歌にも言志といふ事なとはきむかふくて登あ
まそひめりて人々実をに入てうきく中くあまく
かしの世にいて此ころの暮うらいとしきる谷く
んなかかくよみもし時まえしとこその所歟

もきかりし次もよ日もつゝみきて花乃名さへと
きこえつゝたにことわえをいひこの山あひ告ける
鏡に蛙も声ならへてける所と所かる名をのみあひ
気つきを次あらしうきまり只を浪音しきたく
すはなとせらにおもいさきのれ有よむは
わるゝ有し我も

蛙
ならく

しらぬ里ゆく小山田所
かつきゝす蛙
あれ乃こゝろあ

国立公文書館
National Archives of Japan

ゑはくまし紀詠かしさのさかとて又此川わと
さし山路をゆけは墨はせ浦月と見ぬなき
眺て田面乃ゆふもよりもさよ波にのこといへる
まつり此花盛なりとみれは花乃さかりなれは
又ひとゝき行きてかしこにより垣根をこめて
咲つゝきたる桃さくら月の光すみわたりて花紀
きらさら見えも波の子乃ちら錦にあらそいし
よひの色をや比へかんと見りて有明の
奥とて

てる月に色をとりてさく花乃匂へる香
をさなくたとへんいつのたそかれを見て聞その

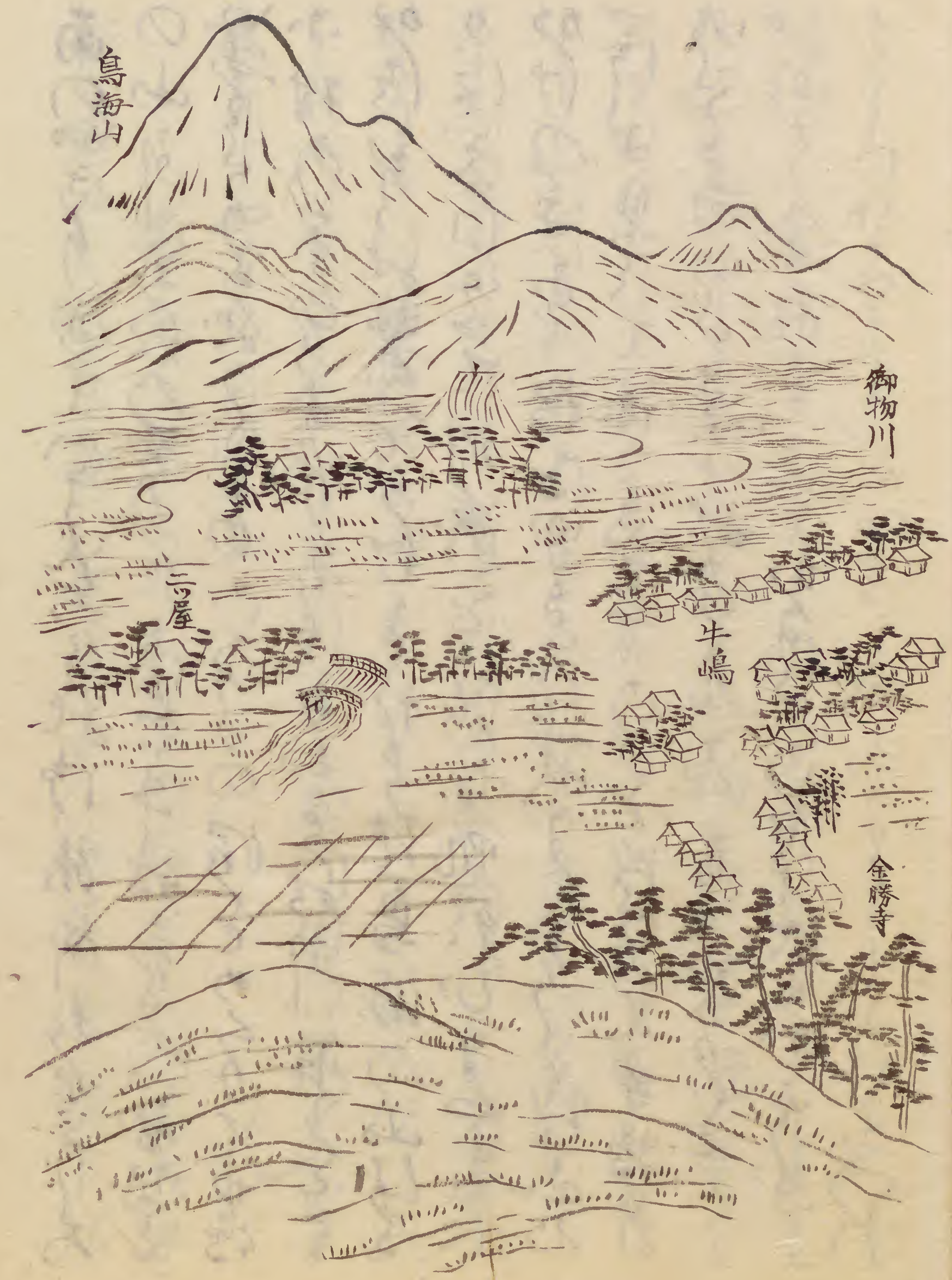
ゆきにかゝるはうつをとゝれ初秋の夕くもりぬるを
花よ山々見てふけたる夜つの影の色をを
きみのさかりくよめる歌

後ももたちかひ以て夕れ山さくらたのめ
らしときまちね小夜の夢

十日さかりよく晴て見に出て紀人有りて
ならの山の麓の堤つゝみ垣根よりの
花盛なるを見てたにそつゝゆくもちもとといふ所
乃あたりにて見わたせはあなしい赤ぬきをとうけいな
桜野まではるかへ西大の塚とかいふ所になき
にありて万福寺といふなりより此様小人乃あはな

ところなりとて、ふかきまやゆゝしくなれとくへき
かならず金鑽寺をまうけつゝ遠さかろうさしなりとて
けふ先かしこにをもむくかたはこれ薬師堂と
いふなるさうしうまを山よりそゝく川はしと流るる
其山川といふ星雨はさらへなりとていさゝよし
牛島ふゆきりて松を越川に入あふとそ田舎の
なりとひ苗代はつりのひきかくるなりたくとれ
ころの夢をそていとまれくミ西門田乃桜らへ
続所しやまとしひらく
継きくなかくしろ垣乃花まさくへんをなる
わらやひさかれさまむせうしにゆきりぬ　柳下

南のかきりは八まんとうふ此佐藤所あまうらの
の山所ふたりの所りてさきに牛島あちら堂なと
いふまうりめ代ゝこなたの流をめくりて中島
ふ村あまもりよりふしきあきりて川やをまく
か流にくこ此葉をうけくなりぬ鳥海の山はる
うにそひえて川邊をのゆる帆影もまやちた
かけつきなる橋をゆきこふ人まてそうさの山乃
一流よ見えて流つきせすなかとくまりて牛島所
ゆくるあゆきゝ此歌花さかりなりと
かすさたやまるこかくし
ちく



雲ゝに一むら雲ちりてぬ京のくもりなれ日和けり
あくる朝ていつくとさためず雲とりあへけれとも
うれしさにちかりはなん此国を見てさらに行程
ありくまゝそのゝ川とならぶ川にすてあまたいと
極乃人も中そのなる川にまて浜かぬ船のうち
にて身をまかせ紀行みて見る浜かたゝねむるさて
めくらうまに紀乃すかてゆくて見ごとにつんで
すゝもなき人浪のかたむかしと川つ出すあま
ぬるなるまて立よりしにむかしも城乃堤の末
まて松原とそく立行つき又川も白くなる
きし根ぶ内とおぼしき行る石浪見ゝみふる

記しけりもしほつゝて中央小笹の中よりかゝ
るあり石組のくふに流れ落るを見上て松
生えたらしくて水の音あとまでたるさぬよし
ありて見る所たる松一もとや石流かくよ梨
生ひて此面と打むかひ枝もともへふしたる
桃桜一本二本迷ひしけてたかくみまる人を
ちしりされえ志ほし石に志りのけて蜜ほふ
にたけれ赤とえ舟とまもしに詠と我
すらなしも乃路くえうなきかひとて水とゞき雪
川くもきよくなる我川のさすらに記るうし我く
あやうけよもえる流荷士の様さし流れとく

くるなとあまきも流留乃音ととて川下此き
にかゝる興ありておもえしもあやまえ
さ流るゝもみ
ゆくすゑかけとうつゝ咲花を我絹まち
がくみ何の何ゆを
右すひ廷田氏流をとむ此末にしむ心に
ほかひくく月下賞花といふを流くきゝ方府
いとよく晴るゝ本の庭の本立に咲まし宿きを
花ともえもいろを松何しるらかく心ひつれる
月のけふ花のひかりぞ枝りいかに
おりてかさる枝くらをも見む哉

十三日といふに中村氏の別荘の花見に人々に
いざなはれて行 庭はた山路をうつしとりて世にめづらしき
御由ともおはすなりしより文田面よりおもしろし
うかみてきこゆるのあり人々はるのゆふべを待て楽しぶ
此ところは花見桜咲めぐりて宴するさましるき一番
ちかくて松のみどりしの庭をもかからす清朝の
嵐山から山のうちより麓へて山くだりとぞいはるる
かのきて其城下港町なる田面をも見わたして其の
むかし我いつもある所なりしが此むかなる処すらを
我はひさしく人は日くらし其後あはれとききて手向
とふなる時おもふ神をたちて稲のまつるあまた酒をも

まうきて此頃のうつきふさとよる男もあり花のもち
見るものひとく門にゆ事をいはまてうつらさて
たるを思ふりありしきらる花のうけなるかへりては
みさくくしれ鳥をとうてきんもいつとへつきうた
いあしひとく聯句してあそふにいそ有

青あらしにさま〳〵月は今ともはなかなみ
うちとるらきをこひゆく

十四日先信乃寸つ西はくれりぬるゆけるはおそ寶
塔寺法幢蕊櫻といつるは名にたかき花なるものは君
よりてみるに此さき見しおもふ風に吹あれ
て枝もなくおりしは今を勝るかつさへ

おほきなる竹て枝まて菅掛は、へつゝいさまに
くちもやしらくはかめる花見すわくのこ
見たり思ひつゝ喜をとゞめむさ日を二字
人もさうり比色めかがれなりきらくひにかりを
思ひいとなきて

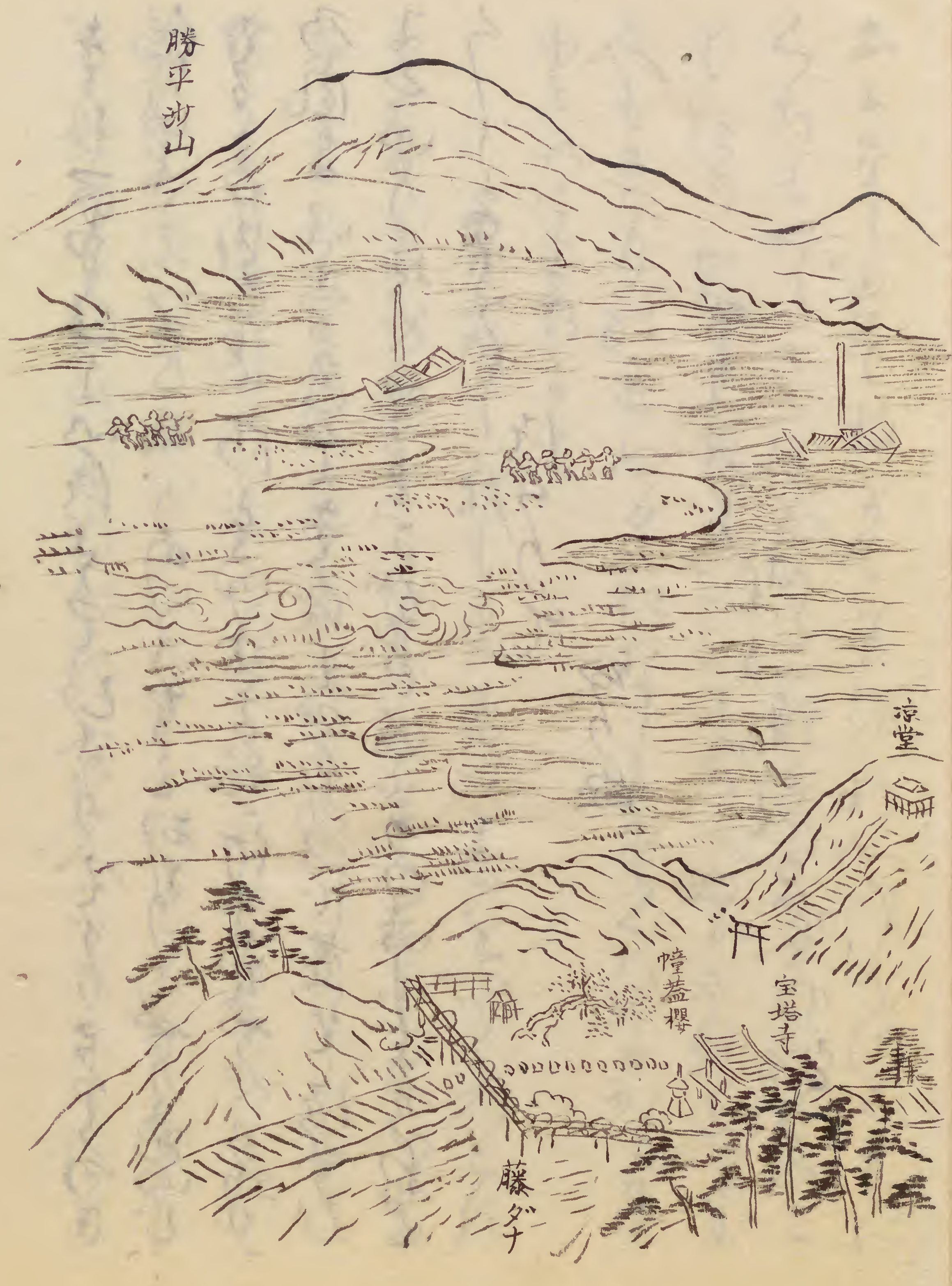
昔人し我も老木比喜をとゞつくのこれ
とゞめるを花まさく明き女何な見ふ立いう
きちもとこ紀を置まそれよの川あしも思ふに
なりし川御乃香の友よふて思もうちとけて
山の白かは別つ山むらひかしこれ也さやまのよし
と舟あまさいきの所乾宿の人かゝつ所しけり

さらつ苔の上はらさまむりまうりこゝまつき
縁ひきさつゝ種くあしなりおもなし思ひあはに
るかはとて時きりふこ経汀に柳やくのか
乃風に吹きつとて花他ものかつて芸生はさし
まくゆり揺くなとさるしまめつきしのれそ
うしあつり

はりて

句也

思ひまなしことなし梅つかはしく
口かゝはらのさと



十五日暁より雨ふれども城乃稲荷湊へまうでせむとし
てふねにのりて神輿あらひまでまつるやうきくに
と心あるに居すまひのほとりに如あさきかしめありてあはれ
ぬる寺とかひてそれを行はさりし人々役してもいふ
おこしさきはいつくさき向ひくこのうらふはきの面
まさに花もなくとてこなたの色は行程し、たちゐふ
あるは幽やちゆんたのぬるもかんこの寺ともいはん
たまもゆよく来こんといふ日のけさけぬる色はなき
かくるほゆうもしけしき矣橋乃ちるや咲とさきむ
うくて人々を待わと又はうへぬるもなひいって
縄をとさて手つくせの村行いらんとするに

旗のまれ志ろうけるよそひくをこそくハ神輿
のつくをのまつよこそこえうり、かさつれ人あまゆき
あひくきたひとのせんもさんなしとて太刀
おましこて山乃尾の多くあるきちたくまよいてる伊勢
乃神垣ハ清きよりきる宮ゐなり本かうき花の
枝さしかつらし葉る時よ神楽おこなふうてあなあり
こゝろそよろめきしとてちりうちそらしひて人の
かりつくまよる時すみや扉くなるそとうけく
猿なく三角ちこ記つき酒のこてあそぶよいく
ゆとなく日かけも山緑ふいらんこんなるそのつき
さいうし給とこゝ思きハ今そ神輿ハかつきをあふ

立そうれ人はるく絶まれぬ河ゆをはなきたりかれハ
何乃界こゝもハその枝なしとうくにかきへいふそれまし
ゆと歸よ旅ぬきハことしれぬよ立まうる村とるそ
くさふ佛のそしのあふいてる金喰寺れ給ふんて
てかしこにまうつ門前よりお堂まて二てうあまり
咲つゝきたる桜ハ高ふかき花の色ハ只雪の如す忍
まはをもまちるもうなるを和尚ハ愛てかく
らふかと月さしあかきて花の梢まふむかる
ふ絶ちとのえを書きえうり人ておりひよすかる
うさのりとす忍はくりかへしなとまれりとり
うちすしきてり

本のなきかげをうたしく佐保姫の花
の鏡と月をうつさむと浮かけにあゆみをつくりて
かゝる菊盛律の川に月のうつりしをおもひまたを
ゆるうところなしとハ何事ともおもふすましきなり
士いはく涅槃解脱抜といふ事にあらずこれハ天
德ある仮の退隠の地なりされ西行などはより
桜をんりしにありて花ぬすをまかしにさけさ
てしなりと雲をとさへくとりされ枝をかす志て次
生きさる事それよりみさみに向きこえさ
たくひなくおかゆ水をみなかのとすゝれて人言
も世次ちりの世もよすましてきに人すゝたる所

なり遠俗の出あひさうさらにはなれて生死の理を
あ西や心にあさはくてあれこにあまりしらむ
ともはかりおそましハ和尚もとのあへまをやしあれ
なきこのまゝまてありてはうて寺社庭ハ山の
うさきしそかしくらまて見ひらのなかハ
ありそこにいとおもはなする桜三月花咲さる
陰にさしひてころんとおもひはなれば
さ花ちるもにはすまて　山桜もあらしき
いふ法のもの小さん所
士なはまてこれよりましハ毛氏の得とひさく花えん
うらをきら批判との花精舎とそいはも

まけものゝ六城乃一家従乃花のかけらん中にそて
こなたへよしくるて我住けん花あちてまいる
り院をにまんめして中かくみのしを中心と
すくうけこなれて生の花の間かきとらいもの乙
小きうもしろかりし茂てもさまちの用意する
我はあらしつきにありくくて久くろきまゝもりて
花乃さとにあまたしてはろかなまてつくらそて
ちもんに桃さくら女とかりして咲ましつまる
御小料紙もろまに君ごろかけくかしかはかる
なさきもしう次をちまんくてに陽雛とさきひ
て庭のすそ小昌あさ山吹の咲てつきもありけり

あそしかへすゝてくすみなくくをいきするかなりあて
のきあはみしゝ中志夜さんとくしかなしゝふとより
東は赤沼よ色ふ何せきらひまて汁あかにうものあさ
の山雲こなたの招根なまに白雪よ桜の咲いて
あるみをとらゝ次てすくしうきれゆきへのけさひ
なり　春乃ひいみとりもいろし白きへ乃もふかす
めれ星乃ゆうこもも
ときれといふあすみのり山吹乃花升やす
かふうけて君ちうさとつくる人て花をそめて
うちめぐる　祠あるを見つうひあり法印めえき
の紫緒きて茶碗せゝしくさるあつもしける

人のうちにいひなされしかあるに陸奥にて
ましまして無
十九年てふことにありしにさすくさまさまありていまし
けるか尊きにすこし絶えて
うれしとまし帝乃御代にかへりて
始終はさくらうらひ哉
後代業かこ山といふはかくし院御時にわりし
ろぶよしかしこの人のかたりしと此てかへし
侍りける無
是もまた大和にはあしのかこ山にはしるの
かしこきみけるかすかし

比叡乃山王権現乃侍りけるさおほく日本乃ほか
御孫所十人流まちにはいつるところにましまして
侍りて尊すまち乃一宗院の立よりて遊の枝
思ひくらうらひて風のまさらひ我のよう
ちりのふさ夜春信も吉つとをこそあかし
うんとはうりやとしひくそれよさしいかにも
のわきき國ふきてからりして侍りけし盛とも
かきりあるはいかとれくうつるひをたをふよいと
まかそこのこれ世乃なかひも今更有さしまて
侍りく咲のいつしきとりうかこてれ無
こくまし無喜乃とうましてをさてひてもいつく

なる世とて花よおもく縁く
此ころ梨乃花さかりなりけるかたへゆくにいたしくにほひき
なる本もありてわかうき家々に咲きまゐり花も
枝をたわむまて咲くるゝ言とあさむくえらにほ
なし乃花のかきてめてらにかほとかはしとして
うち見て思ひ志てよめる
此寺は雪乃さかり也　西郭にまくひなし
ゆきられのいくよ迄て
又いつ比わとかうさのかたねよ物をましかたく
いつるゝへもえいて咲せあてのこなた桜つとこすけき
なんいくちわしくて見ふは風をちぬるとも居

のうらへわもなく義眠林よまうてけしにあうさゝ
義きあひらくこゝちゝは夜志るへせんせいふまうき
しくて志りまたちてまゐ寺居のまつしに志濃
雪見の本物をてゝもし思あなたにみなへより
見色にもたに山のこなたなる中に十町あまりも河りん
とおなかる水うそ清くゆうてくそ水つくこと田とはるを
さうひてた一ともちあり桜なとにかけたかけりそれて
あまりのまと物もれ来給をもうちのめくり山乃尾
ちゝえかけさこなる入ちうひて洲濱とともうこて
出てうら田あふれも山田やうにうゝしそりうく
思うち絶山のそうひ日に咲そ見てるはなしゝあに

うつりかはるえもいはすあやゆきて
古跡しうつうに院もゆかりあれはあなり
新なる所くもなき井出の里乃つきあり
円信寺は法然の安居所也ありて卧牛軒といふ
まいりける松ありてちりかゝさ庭の本えひ
ことにはえて松の田かの十年経ぬも庵の名も
ありひよきつゝもてる
きこえけるかのうし所縁ありてかゝり
かしこや又あるうちのひんとこゝしなふにいて天
きんしふよりの西よりありてのりまては
西洞院白馬寺なといふなるにてたまはる曹洞宗

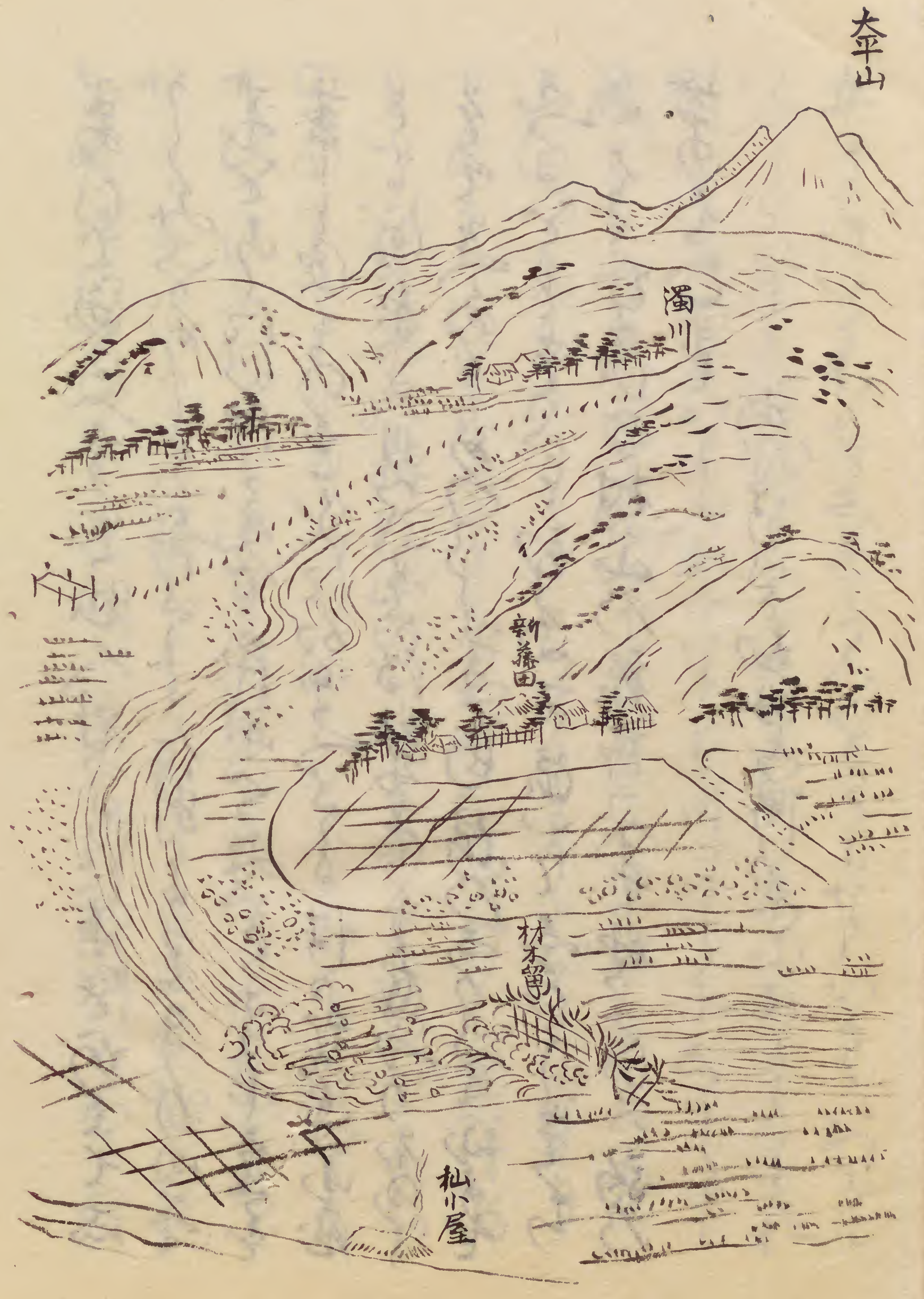
の禅刹なり山を名ひたる寺にて山門をうりて
池よりさまへさまき所りうきゝのかに西村乃つきに塔の
乃桜ちりのこるをとゝめてるもたとさらにか花ん
此ゝ中のりて
きゝよこゝし山の田ひあるおもて桜乃こる本経
のきてもめうらしてうき也松く田中といつもふ
出る山乃くるまをとつくかいつりぬ
清さこる花のちるとまんなるに経所とよくらう
かきに一月松くきなる中ともやとおかれ回
ちる花をさしつまうつゝ也清にこそりき
なふをやよひのくなりてえんといふをまかし

五月はしめつかたある人をともなひていつこと
ふかくさは墨染よりも十四五町東にあたりて仁
別といふ所に宝山口なるも川つゝみにそひてそ
殿とて古跡禮鶴精舎なりし所に入ゐるといふあり
山にのこる京の色くれなりしもみちにかくれなりなり
るまてより所々のしくく四五町をゆけは宜祥房
といふ黄檗山禅院山のうへにあり坂をよもち
のほりて見れはいつもとを下るより右におれまかり
てむかひ小高き山寺の樹をめくりて東を見れは
なりし此のいふかん金ちよりなかきそ城の跡
を町斗ゆくひくく見かける末は淀桂川と云と流

にあひて海に入なる里松へ川つゝみに亭を所々にて志
らみつゝろめしろ志らし仁別よりまたきりなす
亭をさゝにかけおそ所小くみなくさしてなき
事も浪そのまゝにかかへつるはなれき小屋
ともに所々京より見てらは紫雲寺なりものく
さそてさへ多寡もめつらしう見ゆる白浪のさつうしまそ小よせ
かつるとときそ詞なくて浪いてさわうきち
さそむかひの村は山の猪郎をそ此むかひの詞の
葉なんむさも

あきらむまし見り

宜祥庵



太平山
濁川
新藤田
材木留
杣小屋

又半ひよつきて川瀬をとをりゆくもとの山につき
て苗代かまへ多る所もあまたみえしよりつゞきても
侍りまて水まむかへ稲山川ぞゐさの山も水きる所
ありしうち侍りよき代てむかしはあまた中をながれ
しる川なとさるくふめくまる事そおなる此乃
さん見ゐまるりなるもとも書家のまかりきる名
ちしそ引うへ今もしめて見るあめ多ることよ
みやこに見つらしうれしさ

山ぶきまで家の中と給ゐのことより
くゐゐ水の志て皮為字の如ぬきそれをふさらて
あおくり行りて記つしきりかつりきぬ

三日一乗院まて人々残花をとふてまかりけるとき
あられくちるもいとゝをしきをさそひくもとしたに
のこれる花もさかりなれし
携手におりいつゝりくれ

南里を過る所やかんの家松かをるその宿
やむさとひろへまし

七日寶塔寺の藤さかりときゝてゆきてみるに堂
をとりひろ庭乃かたはらにしつらへたる二十間斗
かけまとを花さかりのさかりて花のさかりいかにもさくされ
かくうつくしくなりけるとい小川のさかし南人々
人おほくかしましくもちむきはれえまちつきく酒のみ

はかなしとおもひのこゝろ無れ志て月末あらは
まゐらする數のことゝもはかりめつらしさゝられ
かしこにはけていまはけなりし次第なきことものあやし
ましかくも宗なれはうけを給へてこひなけれは
あまりひきくるしきたるもおもひくみまゐらせぬにはつき
なきとまもる春れをしのことおもひゆるも何やなき
やはらかしあさく立かへるとはかなくはなくさ
むるさきみ行し息ありてこそ
ふかきこのさうりとうけて君よりくめて
さらぬ花のさかえの色
たかきにちらしとゝいふ所にあまた此わたりといふ處

息あるまゝにつけて松山かへきさむひしゆかしく
なりけれは江戸よりめしおきしことへの手紙に
あるたよりひとつかはまいりてい故に黄金三にて
といふをはなましをしも道のさまへいはす遣ゑい
何ほんかかなしすといひすゝめて今般とく
きつきてかへりあるれのつはゆる御身のかな松
ふるさりたるふいふところにめくらふるとあるへし乃
子供ぞおまへ略にしはもえくさは我は供
よはかりひとへつかんといふはしてとて出かへるを
往母なるをりしもおのつとやにゆかんと添くて
むかしそとのの隣なる女房くるに来あひたる翁

なりときくもりつき家になりてきつゝ男とゝか
きこえつとおくをて十一人あまりよそて出てある
しらぬことてうしてわさとす翁はさけこのむ
人なりてえたるとやまなりけるわさしとゞつ
巳乃時斗まで法いつりえいろを見れもありある所
にやましくひらく翁さうつきてうてあまてらひ
つくらけをもてくいちまやくとひすきてかはく
まさにらもいひつゝも周祥菴よりはき給へ
清和なる院あるに山をとひあるに河辺にくる
て人の事とらけるに給へととむるにつきてみれ
にうもおもうくるひとりなりしをるにあをくし

もりも北田面にまかせし水はよおつもきるとあまさ
ところはきたりくかゝけくすく山あひよなむすく
飛騨者乃を車にはわすれてはるかに河つゝと
るゝく里ある所よいさりぬけるそて川かなたの
ころもてくなかれひとつく里比川とわかるに至
川といふ今えとつは東乃山の麓に流れて河を
いふけ里比ありしに翁のさつる人ありくゝといさなひ
をきくよりやうくワりこえしき酒くみかはす翁い
たく悦ひきて粒あかぬさるなかりきと人くまか
ひてかへるうくく孫をいひまいて盃とりかくし
ゆるきこともあるをもてあかし小河つへ流く

ゆきとて立出もて翁も然きあてさるましにこつ
よろなひいろかけきけうかさ田名つよ人のはこへるハ
早苗うふるなりとなれり此國も宮乃田ノを作
苗代をつくきもんいときくひんなる苗をとろ
のるもまうてかく乳うけてうかる事とすか、
もて秋のとをあへ、ほしよ給わらまるみのりまく
刈つみて、ゝ國ふりみかえまてるに人乃ことりあるを
草木みんてもかくさにとの外ふある事ヽとつゝまりす
ちらしぬへくおりひたりさるうしみる乃葉もむ
十二十杉ちこ淹れむまさそりけりとさ春に
いろふかおそろしきなきてむけよとちかるきも

て人のけまちひかくきたる衣まてをゆきくらす
居をまかくるにも芝生あとところて行ふ所をさら
かけし流水なかけきかへるまへ流しくきことに咲
みちくきをりあなすおかゆるあまり派こえすき
かくてのわりそ村うけたる人さへもあつかり流
杉すとてこゝろやさ人もみまなきとの
はらし霰つくにまんはえゆるきろきやと
杉の田かるとくろく湯澤といふむらよ人の
の年まそり出湯あらくくわさの人もつ毎に
はとひつくみきちしうまゝにその湯あせて
後今いかくきくしきなりかへりぬと必そ

いとふかゝりき丸木をわたせる橋ありこゝを
わたりてまた山路にかゝる湯次の寺といふ
はるかちかくつりさらなるあたりふりさけみるかく
てゆきゆきてたとへをしるしけるこの山はさな
かりしに雲くも川つゝみのうへにかはりて流
さる也流さうにみえけるむかふに山また雲
かさなりてそことも見えぬところをまるくとのかり
くるまゆく早蕨山のもかみのもとに生そひたりしを
又ることにける

山のすそ尾上のつたひちより日光ゆくるゝそ
うぬすきこまそれるとこゆなとちうらいつゝもてる

何事も少き孫とゝもにゆきてこゝの翁もあひ
志りてぬれよくいつてまし十とせとちとふきて
行旅にて早くあなたなるむかしなけあるわか宮
をわすれしはすくれて山にちりつきてみえ
にめくりてくらまよりつゝく人家ある里よいて
たちて松原なる所といふをあゆみかの補陀寺も
ちかうきぬるうれしさにすゝみさて雲松
志りとる中に山門あり亀蔵山といふ額
かゝけありまた仏殿のわきにて此国また
見てまかる寺地信州に永平寺の輪奉をたるさ
とりて三百年にあまりたる所は見ちせんにして

かしこの法務とりおこなふにつかうまつる山法師
に大てらのおほんしてあまた路をふとく
尊しとうむくつき庭につくらん事は山水をかけひ
にかくれもなくるゝをと絶まもおりんまさへ流しけ給ふ
人つるさすりてむかしをおもひあけのむかしめり此寺は三世に
ろしめすしあきこそあかりけりさきくも後醍醐の法門
のまかしあかし藤原のあまさもすて出家
ありもちのみくさりて仏法ありし事といはとめる
ほうもなあらかる大御寺此うろの門よりかきて
坂をくたれば岩間のきしき山ありたまつりつき
てみまりな出てもて是れ縁て岩門へそれ道

となの海山より水のなかにこそかけて長く一部の
ちかりあり出る事あつも信らたをとりつくあれ
中をきて方角に一町あまり志かきわけこまなる
ところせかせて言ちなれけ田面を引かくる是を
人ていまさりゆへつきまつて色々に一さかりもありある
在せまして水のうへをたちひゆくまくらよう世を
は恋しくあやにきれを経んしてさよ在のなかれ
はゆりに家のことくゆりとわれさするつくりかまる
なしひとそてりめしこえてそふかんのあくれ
水顔にせきあひなく流てもをや路をみきかけ行く
ろくつまつかうしして芝生に乃かりわちぬ流る

路いくきもちかくなりてさかりあかりて又さかりくたりてさ
かりて二町ばかりとさき晴てそきらぬ山ぎはにか
るちかくはひの外にさく見えていつる山の尾に
きつきて松しけき竹しきなかにこしらへあり
嶋にてそ後くしたる絵かきといふははるかにおもかくし
もとひけるかちかしにて雲くくかさにつく清澄
おほかるゆくてはなく松まりける坂ありて古萬
くるまそといふ山の下に有さく濱なりけれて寺
うめのをおもかくしたてゝかちひつゝ山ちかち
後は申し盤かるをゆくてそ見えつけ西文深
山仰の言といふ寺記の主すくまなるおある松さえ

むまて咲こゑ色ゆるあまとてころにはまかりめも
あるなおかれ中色とかさけうしきにみえてもあまさを
しそくなりまれくへすむかしこえて請なみ
嶋きてそへ雲ゐまかしらまつるてる見きあくまで
いとをかし岩あひひのそひしろかける枝をはるか
ふるきくふちくてるはいそりぬうちそそく観世音
を安置しきてまつるところとて二王門より
ちかくのかそくもりみきさゐをおかけり山のつきけ
なるひをあかくはいくへとてはかりなき松寺
きすおひくえて枝さしかさしかけは家を
そとつきまてにけなん皆海見ゆる舟の帆遠

らはさとつきものといふかゝる杉はまことにすめつら
しくしもあやしくしもさるくよ杉わたぬつきは
てこのまゝ神ならず杉ひとこゑに杉たる杉
また根ふかく神々るあたそのめぐりはくこそ
さりとハ不思議ぞと思ふ次杉わきさいふなり
なし杉や杉といふよしをかたるこれが見と
あるそ生ひそめし杉とはなちりあり今に見
今かみさく杉ところのまへいとくらしきまして
思をふかきもなくてまことに志をへ門の前に
ひとつはなひきてこまよきに杉の思を以へる
くさえりのけて詠ずるまへうしろこれさとき

山まそをとめの乃ちにあることもちしてこあけ
ら瀬川そこのこゝろ流ぐるのもきこえず
苔をひきあて酒乃ながき事もとゝまへ杉とふ
事かきまれしゆとあもちてことあさ次またと
霧くみりもえゆらしいふきんまへもなかの杉れ
此うらかそてやまぬかくてあるつきなつ杉も
思をとこゝろあかくおとこうし及ふか留湯さえ然
景いくるしうりのまさとそまことあるハ乃かして
河原引をひくゝふくらきの河
のやらうさ引しいふ

神陀寺
夫婦石
メヲトイシ

藤倉
七曲

山階なるこゝのや昔ぬとてゆきゝしもけふよ来て
みれは粮多白雲よのこれるよ人く思ひおこして
夜とゝきつゝいつるまてをもし此頃の法
香やのわたりそやよりみなかへりきぬる
廿日人々よめくして多様の金泉寺よ詣ふ
はるもてまつよけもて寶塔まつ此庭りみるとて
住ふ人やうく彼てつより庭の法きのうちひち
おもんけりなしも日くらし暮て来るにゆき
ちる春あんし花はつまふきりくみとり城
本信る白法しの響よ咲いてこちむとれとさ
てみん西へくこまてとめてかつ西法くる法あて

よあらうき
さくひは髪ともいきや志つ法にしおつす盤
のさ形ふくうかして
八幡は十六日ときゝおは四色とおの方二方くみを
のちかりてさそたち色りよめしうやせすも色やう
西ふこゝとりねるの日おもりひ法くなぬ
まちいてん雲名もみなをふりく次
きひの都り此五月西乃そこ
十五日は守法江戸より法の世の日として城乃
うちよりはしめ道錺りとかるく法くらひ
めみもちつ日かつときゝもつしめそ國よ入きのふ

事なりしを浪もめてたく云けるはへにしへの字
のちにはひとのみぞそてまいらんとてわけゆかる
よりまてきぬる人々七十人よあまりぬることぞ町
のうちの者どもこぞりてあまた人々ありしむつる千歳まで
立ならしとのきてもわかなしつとまかりこに
まいれ年ごとに御さかえつゝ御めぐみて
いしく御代つゞきせまちたまふに入てまいるれ
らしき姿うたくしう御馬にてあるを皆めで
たき御あそしみえてまつる所にて庭さへ合り
なく晴てめでたき事ともきこしくとうちあり
十九日又うらまち中村氏のりとかゝりけるよ

みゆきかとはちゆし花は色もことより咲こぼれて
夏かけき庭の其のけはひしよ見えし来しき
いそらもてうき庭しうちわびしくしつのは
まことおもしろしも柳なりつゝんし所は其
菜に咲たる木の下にも
見るとりたる人々庭の牡若をとめて言せられ
なしてすむ池のこゝろもかきつくさん
てぬきれの心をまし花さき
次の日一条院よまゐりてしに此ら鶴は花なとそ
まつ人々も清とのことにぬぬるよしひくらきしうえ
花ゝ見んし人めぐらし寄せあまたに

むかし法乃静なる在山となりけれは鈴の音
みんなもそくらゐの内ますつゐにもさきて
えもといへる人のみなつまりてそのすかたと也
堂の軒に巣はくりまするはかなきしはまれく
入りていとよく人になれてかくれところのに
子をとる軒の内のあの立つりあすは
らてもさそひとゝめて忍
北方長野といふ所に住と詠てこれりける
ところのいにしへにまきれたる海いふ長沼也
いふをききて庭にみんなしていと興ある伝
展なりけり此和とかきつくさゝりなるもの

ことりみんな祢んなくて志る告りつとせるか家
小はるかなる沼のこも海すけとりるき乃りた
中にある夢の花のかきつりなくも咲きてとき
なめてしてけんかかんりておわりるかきつき
はるかにめてそらる沼に和るもさちて花か
人もつきはころる市まさそてくるか皆けいより
ともれする筆といへりあるし許としてあしまわ
しれるもことせちるにいくるもて
杜若をとつてことりぬか咲る藻
添かすも志つまます着のけるくる和なのあまき
なりきかれて

かきつくしおくる人ありと門ちかくなく
日をおかやおもひわするらん
ある月もほとゝきすはなかぬるときまさる時雨の初雪
ときされ北国にまかりて、いのちをすてたり田舎
すはさまさうにきく事あるとおもふはすると
きうぬとしられくあるかりといふていとあまり
すゝろんもちてわかれのひつくらぬ
結をとなくひよかりに時なくつゐ
とうにくるかひなき
江戸より来あひてきこしくかうふ人謹
きちよよるふをとうなありけきころまつは

てゝ人さまあるをしらぬ念仏申たるもるをすくうそく
やとらくひまりとあていひすれさせかうる気を
見きのそくんはなつきおかうかさても人あのほとまし
さをきゝ涙くるしさ事よ思ひてすかく見
いらへてもせさてなるよ行けてるをさへいとくいひ思
さ今はいくましき人ちするとをれ川のさき
出ていてうをすしきかうきうてつ語らと
なきは何かはなさまるしときおもてかくちまさま
えせんきへなりふかふつひきるもこと人
まりは親まていうくはきんぬすまてや升て
ゆりまよしうくてよのれなうつゝはとてとこのくても

あまつさへちゑはすゝろにすゝみて侍るまゝにて
ゆかりあらん人とてもかくは口をしうおもひなと
きこゆへくもなけれはやさしうひきかへさる
くちをしさそれあしう思こそ侍れまことに
すきものゝやうに思ひよりても侍らめり心ふ
こゝろにはかゝることのおほえ侍りぬへきすちらきにて
はかなくいはんかたもなけれはさてあるへき事
なるを申さんもはつかしうけしからぬさまなれは
なにとなくてかつらの山にゐたえいつしか宿には
すむ鳥の梅の一枝をおりそへたり物なつかしう
と思ひて水のうへに浮草をうつしておもふやと

しられそれひとたひは露佛ぬるとまゝなる
みえはつけてもとましう袖をもあはれ
いましめてはつけてもなみた川
んのなかやあさましからんと
いとはつかしく
かしく

大日本帝國圖書印

国立公文書館
National Archives of Japan